

奥野朋子編

奥野朋子編

一月七日（土）

沙綾が物珍しそうに、居住スペースのリビングやダイニングを眺めている。私は私で、そこに娘がいる光景を新鮮な気持ちで見ている。居間や吐き出し窓の向こうの景色を確かめると、いつも通りの手付きで使い込まれた椅子に腰を下ろした。隣に置いた紙袋を覗き込み、カバのぬいぐるみを取り出した。

「カバの何がそんなにいいのかしら」

「ただのカバじゃなくて、コビトカバよ、コビトカバ」

カバのぬいぐるみを抱えて、キョロキョロしながら辺りをウロつく。何かを思いついたように階段の下へ降りようとするから、「サロンスペースにカバはダメよ」と呼び止めた。

「あの空間に置いていいのは、ホワイトタイガーだけ」

沙綾は不満げな声を漏らすけど、私は首を振って改めて否定する。そこで面倒臭くなったのか、隣の和室へぬいぐるみを置いた。

「ニフレルのホワイトタイガーだけど、ファミリールンドのホワイトタイガー、だっけ？」

「そう。宝塚の空気をちよつとだけ、ね」

ニフレルで買ったぬいぐるみに宝塚の要素は微塵もないし、ファミリールンドも閉園してから永いけど、サロンのイメージを少しでも補強してくれたらと思うて置いている。リラクゼーションに丸いコビトカバも悪くないけど、ハイソなイメージは保ちたい。

テーブルに戻ってきた沙綾にコーヒーを出す。沙綾はスマホの画面を見たまま椅子に座る。

「一輝、もうすぐだっつて」

沙綾は顔を上げ、コーヒーを啜った。時計に目をやると、もうそろそろ一七時半。お店の予約は一時間後だから、流石に間に合うだろう。沙綾はコーヒーを飲みながら、インスタでも見ているらしい。

「あっちの部屋はどう？」

スマホの画面をスリープにして、テーブルに置いた。

「まだまだ、なぐんにも」

「全部持つてきちゃったけど、良かった？」

沙綾は頷きながら、「今のところは」と言い添えた。スマホを手に取り、写真を見せてくれた。少ないなりに家具はあるものの、部屋の広さを持って余しているといった感じで、部屋に馴染んでいる、納まりがいいという雰囲気ではない。

「彼は才能豊かなデザイナーさん、じゃなかったっけ？」

「外側と中の空間づくり、はね」

「お友達のインテリアコーディネーターさん、紹介しようか？」

私が返したスマホを受け取りながら、沙綾は首を振った。

「春までに決着つかなかったら、その時はお願いするかも」

沙綾のスマホに、新しく通知が届いた。「一輝、駅に着いたって」。彼女はスマホを仕舞い、そそくさとコートに袖を通し始める。私は汚れのないシンクに、二脚のコーヒーカップを置き、支度が済んだ沙綾に、「先に行つてあげて」と声をかけた。彼女はなんの遠慮もなく、自分の鞆を肩にかけて階段を降りていく。

戸締りを確かめ、空調を切つて、灯りを消す。いつもの家、いつもの暗がり但至少だけ広く思えた。和室のコビトカバの頭を撫でて、玄関へ。靴を履いて待っている沙綾と共に家を出て、ちよつぱり賑やかな土曜日の住宅街を、地元駅の方へ向かつて歩き始めた。

初出 令和三年二月二四日 PIXIVにて公開

二月一四日(火)

久しぶりに娘がウチに来たかと思えば、可愛らしいお客さんを連れて来た。二階から上の自宅スペースではなく、一階のサロンスペースに作った応接セットへ座ってもらった。お客様用のお茶を入れながら、沙綾の話を聞く。

「へー。一輝くんの妹さん……」

沙綾の連れて来たお客さん、瑞希さんは少し緊張した面持ちで目の前のお茶を見つめている。沙綾に「遠慮しないで」と言われると、「いただきます」とグラスに口をつけた。

「立命館の学生さんで、映像の仕事をしたい、と」

「ええ、まあ……」

服の上からパツと見る限りでは、全身のバランスは悪くない。沙綾のようなメリハリのある体型ではないが、スレンダーで付くところには付いている十分に魅力的なスタイルをしている。背丈は一六〇cm未満、極度に痩せている印象もない。

今は肩に力が入っているけど、姿勢そのものは悪くないし、歩いている姿や立ち姿は程よく力が抜けていて、流れるような所作が身についている。一々派手な沙綾に、少しは爪の垢を煎じて飲ませたいくらいの好対照だ。

「出る方じゃなくて、撮る方をやりたいのね」

「お母さんもそう思う？ 演者をやらないのがもつたいないと思わない？」

地味なくらいなのに、不思議と耳目を引く器量は、十分に映える逸材に思えるが、彼女自身から出るプレッシャー、役者っぽい気迫のようなものは感じられない。

「高校生ぐらいの時にも、そういう話はされたことがあります」

瑞希さんは、「『葬式の名人』って、ご存知ですか？」と言葉を継いだ。

「地震の後ぐらいに公開された、茨木オールロケっていう映画？」

彼女は頷き、撮影時の話を語り始める。

「エキストラについて声をかけてもらったんですけど、場当たりって言うか、テストの時に交代させられちゃって」

近い背格好の友人に出番を取られてしまった、と。

「何となく悔しくて、公開された映画を見にいったら、個人的にはイマイチピンとこなくって……」

瑞希さんの話が一旦途切れる。沙綾は全くピンとこない様子で、「それで、なんで撮る方をやりたくなつたの？」と瑞希さんに続きを促した。彼女はお茶で口を湿らせると、「茨木でも映画が撮れるんだって思ったら、なんか嬉しくなっちゃって」と言った。

「でも、映画は茨木らしさがあんまりなくって……。もつと茨木ならではの映画ってどうか、いい映画作れるはずだって悔しくもなっちゃって」

瑞希さんの話を聞いていた沙綾が、稀に見る真剣な表情で彼女を見ていた。

「で、映像作家の修行として、沙綾と一味違うYoutube動画をやりたい、と」

「沙綾さんがインフルエンサーとして活動する合間に、私たちの映像制作もやらせていただきたいんです」

瑞希さんは「よろしくお願いします」とテーブルに額を擦り付ける勢いで頭を下げた。

「沙綾はそれでいいの？」

沙綾の目はいつも以上に強い意思を湛えて、真っ直ぐ私を見つめてくる。瑞希さんに、頭を上げてもらうように伝えた。彼女は顔を上げ、「いいんですか？」と言った。私はそれに頷いた。

「あなたの地元愛、作家のプライド、気に入ったわ。ただし、学生だからって中途半端な作品は許さないから。私にも沙綾にも、紹介するお友達にも、失礼のない映像を作って頂戴」

「瑞希さんの顔がパツと華やいで、「ありがとうございます」と勢いよく頭を下げる。今度はテーブルに額をぶつけ、グラスに残っていた彼女のお茶が少しだけ周囲に溢れた。「大丈夫？」と笑いながら瑞希さんを手助けする沙綾に、私の中の何かがグツと揺さぶられた。

初出 令和三年二月二〇日 Pixivにて公開

二月二三日（木）

沙綾が出演する舞台の初日が終わり、いつ終わるか分からなかった楽屋話も一区切りがつき、出演者は仲が良いもの同士で三々五々、帰路についたり、飲みに繰り出したり。沙綾は楽屋まで来てくれた瑞希さんと、新しい動画の仕上がりを打ち合わせるべく、市役所近くの電源が取れるカフェに向かった。

彼女らの影のプロデューサー、株式会社Zサイズさんの学生バイト、原田哲朗さん、その妹の美桜さんと共に、私も脚の高い椅子に腰掛けている。沙綾と瑞希さんは奥の席に座り、美桜さんはその横から編集画面を見ている二人を見つめている。哲朗さんは、女子三人を私の向かいからやや遠巻きに眺めていた。

ウェイターが背の高いグラスに入ったカールスバーグを運んできた。哲朗さんの前には、似たようなグラスでジンジャーエールがそと置かれる。

「呑まないの？」

一緒に運ばれて来たチーズを摘み、グラスを傾けた。「ええ、まあ」と答えた哲朗さんは、沙綾たちのテーブルをジッと見ながらジンジャーエールの細いストローを口に咥えた。

真ん中でパソコンを操作している瑞希さんが気になるというよりは、その周りでチョロチョロしている美桜さんを気にかけているらしい。兄の視線が気になったのか、彼女はこちらを見ると、少々不満そうな表情を浮かべ、自分の飲み物を持ってやってくる。彼女は数歩手前で息を吐き、負の感情を顔から追いやった。

「お忙しいのに、ありがとうございます」

「いえいえ。日頃からお兄さんにはお世話になってますから」

美桜さんが離れると、賑やかだった編集会議が少々緊張した雰囲気が変わっている。言葉数は少なめに、キビキビと作業を進めているらしい。哲朗くんと一緒にそれを眺めていると、美桜さんは彼を小突いた。

「同席のレディをほつたらかしのしない」

哲朗くんは「あ、すみません」と私に向き直り、頭を下げた。

「別に良いのよ。オバさんだし」

私の言葉に、美桜さんはとても困惑した顔をしていたが、ザックリ編集が終わ

った瑞希さんに呼ばれ、そっちの席へ移動した。

「政治家志望の妹さん、だっけ？」

独り言に近い呟きに、哲朗くんはしつかり頷いた。

「あなたの方が、向いてるかもね」

「え？」

「なんでもない。オバさんの独り言」

テーブルに運ばれていたカプラーゼに箸をつけた。唐揚げやポテトサラダも並んでいる。娘たちのテーブルにはピザも運ばれている。唐揚げを哲朗くんに勧めると、彼は少々かしこまり、「いただきます」と口をつける。一口かじつて食欲にスイッチが入ったらしく、自分の取り皿に少しずつサラダやトマトを移していく。

「そうそう、それでいいの。どんどん食べなさい」

中肉中背、いや少し背が高いくらいなのに、なぜか線が細く思えるというか、他を威圧しない柔らかい印象をしている哲朗くん。柔和な顔の割に、時々頑固そうな気配を漂わせることもある。アーティストっぽい瑞希さんとは、意外とお似合いなのかもしれない。

美桜さんに見せていたパソコンを閉じて、今度は沙綾がそれを持ってこっちにやってくる。代わりに、美桜さんのドリンクも持って瑞希さんの方へ来いと哲朗くんが手招きされる。彼は自分のお箸とドリンクも持って、座席を移動し、哲朗くんの座っていた席に沙綾が座り、パソコンを開いた。

明日の公演終わりに劇団関係者に見せるという、新編集の映像作品。妹にやいやい言われている哲朗くんを視界の端で気にかけてながら、再生が始まった動画に気持ちを切り替えた。

初出 令和三年二月二八日 PIXIVにて公開

三月六日(月)

昼下がりに、駅前の喫茶店でコーヒーを飲みながら、残り僅かな文庫本のペー  
ジをめくる。臙脂のスピンは、昨日読み終えたところに挟んだまま。

ランチタイムには少し遅い時間帯とはいえ、しつかりしたランチといいコー  
ヒーを淹れてくれるココの店内は、色んな年代のお客さんで賑わっている。目の  
前で古い友人の昼寝に付き合っている身としては、すっかり薄くなった頭を眺め  
ているよりは、返却期日の近い本の世界に身を投じている方が、気が楽だ。少し  
冷めたコーヒーを飲み切り、おかわりをオーダーする。

ウェイトレスが新しいコーヒーを持ってきたところで、目の前のおじさんはゆ  
っくり身体を起こし、額に上げたメガネを元の位置に戻す。その仕草ひとつひと  
つに、おじさん臭さが纏わりついている。

「僕も、おかわりもらおうかな」

彼は寝起きの顔を両手でマッサージすると、近くに来ていたウェイトレスに注  
文した。ウェイトレスは「かしこまりました」と笑顔で答え、空のカップを持っ  
て下がった。

「朋ちゃん、ゴメンね。鼻炎薬でさ」

眠くならない物にすればいいのにと、彼は、眠くならない奴は効がなく  
て、と答えた。私の読んでいる本を見ながら、運ばれてきたコーヒーを啜る。

「東野圭吾？」

「そうそう。映画になるっていうから、今度はどんなもんかと思って」

「で、どう？」

私は読みかけの本を閉じ、肩を竦める。彼は「だろうね」とコーヒーを飲んだ。  
私は文庫本を鞆に仕舞う。

「もういいの？」

彼の問いかけに、小さく頷く。最後まで読み切らずに、返却ポストへ投げ込  
もうかな……。

「沙綾がこつちに来るのは来月だっけ？ ケントは、」

首を振って答える。

「そっか。会わないまま、二十歳、か。元気にはしてるの？」

「向こうで元気に大学通ってる」

彼にしては珍しく、「ケントが大学生か、想像つかないな」と随分しみじみとした様子で呟いた。彼が健人に会ったのは、八歳の頃が最後だっけ。

「四年前の写真ならあるけど、見る？」

「いや、また会う時の楽しみに」

彼の手振りで出番を失ったスマホは、さつきまでいた鞆の中へ逆戻り。

「おっと、もう一四時か」

彼は自分の腕時計を見て、カップに残ったコーヒーを飲み干した。

「僕は戻るけど、朋ちゃんは」

私は首を振る。

「じゃあ、お先に」

彼は財布から五千円札を取り出して、私の前に置いた。そのまま流れるように、喫茶店の扉を開ける。お店の外に出た彼は窓の外から私に手を振り、株式会社〆サイズの方へ早歩きで去っていく。

私は残りのコーヒーをゆっくり楽しんでから、駅前をぶらついてバスに乗ろう。駅の向こう側に出て、イオンモールを覗いてもいい。

まだ少し肌寒いけど、だんだん春めいてきた。宇野辺までのんびり散歩して、モノレールを乗り継いで帰るのもアリか。

最後に数ページだけ残った文庫本を、もう一度鞆から取り出した。イオンモールへ行くのなら、中の図書館で返却しよう。どこまで読んだか記憶を辿りながら、「この辺りだった気がする」と手を止める。今一つ肌馴染まない物語も、最後まで見届けてあげようじゃない。

三月一五日(水)

朝のメールチェックを済ませ、時計を確認すると午前六時四四分。三月も後半に入り、日の出が随分早くなつたとはいえ、まだまだ少し肌寒い。起きがけのスキンケアはしつかりやった。日焼け止めも忘れていない。

ランニングウェアにウインドブレーカーを羽織り、愛犬のケビンと共に散歩を兼ねたジョギングに出かける。軽い運動のつもりでも、成犬のゴールデンレトリバーに合わせて走れば、それなりの速度で景色が後ろに流れていく。

早めの通勤時間でもおかしくない時間帯なのに、この辺りの住民はこんな時間から出かけないようで、私のように犬とお散歩する人や、自宅の前やゴミステーションを掃除する人は見かけても、スーツ姿に革靴で急いでいる人は見かけない。隣を走り抜けた公園では本格的にトレラングしている人もいたし、彩都西中や雪稜高校の方からは、野球部やらサッカー部やら、運動部の掛け声も聞こえてくる。女子バレー部の力強い声も心地いい。

車通りの少ない大通りを渡り、坂を駆け下りてモノレールの高架に近づく。そこから右手に曲がり、真つ直ぐ北へ。ミニストップが見えてきたらさらに左へ曲がって、モノレールを潜る。彩都西公園をグルッと回って一息つけば、朝のお散歩は一区切り。だんだん体温と息が上がってきたけど、ケビンは主人を気遣って、ゆっくり歩いてくれるかしら……。

「あ、お母さん」

ベンチの横に差し掛かったところで声がかかった。お利口さんのケビンは上手に速度を落としてくれる。

「あら、一輝さん」

「おはようございます」

長女の彼氏、一輝さんが仕立てのいいスーツを着て、ベンチにコーヒーとパンを広げていた。挨拶と共に「随分早いね」と返すと、

「今日は、特別に。どうせ特別なら、そのパン屋さんで特別な朝食をと思ったんですが、水曜日は開店が遅いんですね。失敗しちゃいました」

「それで、コンビニのパンとコーヒー？」

「まあ、そんなところですよ」

彼は笑みを浮かべ、ケビンにも挨拶をして全身を撫で回した。

「おっと、もう行かないと」

チラリと腕時計に目をやると、慌ててパンをカバンに詰め込んだ。

「じゃあ、失礼します」

「いつてらっしゃい」

一輝さんはコーヒーを片手に、駅の方へ走って行った。蓋付カップのコーヒーがこぼれないように、上手にバランスを取りながら、力強いフォームで遠ざかっていく。

いつの間にか私の隣で大人しくお座りしていたケビンが、下から私の顔を見上げた。

「ゴメン、ゴメン。行くよ」

私がゆっくり走り出すと、ケビンも徐々に速度を上げていく。芝生の上を抜け、駅に向かう人たちの邪魔にならないよう、バスロータリーを大きく迂回して、再び住宅街へ入っていく。

毎朝すれ違うご近所さんに挨拶して、ケビンもたつぷり撫でてもらって自宅に戻った。ケビンのリードを外し、たつぷり水を飲ませてあげる。愛犬が美味しそうにがぶ飲みするのを見届けながら、私もミネラルウォーターを手に取った。

今からストレッチをして足を入念に労ってから、愛犬と一緒に朝ご飯。今日も一日、頑張るぞ。

初出 令和三年四月一七日 Pixivにて公開

四月四日（火）

一輝さんは沙綾が置いて行つたコビトカバの大きなぬいぐるみに微笑んで、私に車のキーを差し出した。

「娘の彼氏を運転手にしちゃつて、ごめんなさい」

彼に椅子を勧め、その前にコーヒーを置いた。彼は「いただきます」と、カップを口元に運んだ。

「お砂糖もミルクもいらなかった？」

「ええ。いつもブラックなので」

彼は一口飲むと、少し目を丸くした。改めて香りを確かめるようにカップを鼻先で動かし、もう一口飲んだ。

「良かったら、何か作るけど」

彼はチラリと腕時計に目を落とした。もうそろそろ午後六時。我が家の小さな冷蔵庫に、果たして何が残っていたかを思い出す前に、一輝さんにとっても柔らかい表現で申し出を断られてしまった。

「この後、沙綾を迎えに行つて、そこから何か食べようかつて話をしてたので」

「あら、そう。じゃあ、車使う？」

さつき受け取つたキーを彼の前に押しやる。彼は手振りを交え、「いえいえ、バスで戻ります」と言った。

「バスがダメなら、モノレールでグルツと。お義母さんも行きます？」

多少の荷物があつたからとはいえ、車で行つて戻つてきた道を今からもう一往復する気力は残っていない。

「若い二人でいつてらっしゃい。おばさんは、お土産のワインとパンを楽しむわ」

さつきのパーティ会場で一輝さんが手をつけられなかった物と同じワイン、同じパンを指して、できるだけ嫌みつたらしく聞こえるように言つてやった。彼は

コーヒーを楽しんでいた時と同じ涼やかな表情のまま、「そうですか、残念だなあ」と呟いた。

「今日は本当に、ごめんなさいね」

知人のサロンを手掛けてもらい、担当のデザイナーということでお披露目パ

ティにも出席してもらったのに、ハンドルキーパーを買って出てくれたことに甘えたばかりか、おぼさんの意地悪も意に介さずやり過ぎしてくるなんて、非常に申し訳ない。

一輝さんは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情で、ただただ困惑しているようだった。何故か私の方が慌てて別の話題を探すべく、少ない知恵を絞り出す。

「沙綾との約束は何時だったかしら？」

「一九時頃に箕面萱野駅、とは言ってますけど、向こうの都合次第ですね」

会場で別れる時、「友達と会う」とか言ってたっけ。こんないい人をあまり振り回さないようにしなさいよ、と心の中で娘に小言を言ってみる。ワガママも美德、器量と教育してきたけど、少々やり過ぎた。

一輝さんは私のことなどあまり気にしていないようで、マイペースにコーヒーを飲み切っていた。「もう一杯いかが？」と尋ねると、「トイレが近くなるといけないんで」と辞退された。

彼はズボンのポケットからスマホを取り出し、腕時計を見ると、椅子から腰を上げた。

「もうそろそろみたいなんで、もう行きます」

彼は空のカップに目をやった。私が「そのままでもいいわ」と言うと、彼は「飲みっぱなしですみません」と軽く頭を下げた。

「コーヒー、ご馳走様でした。美味しかったです」

「そう？じゃあ、また飲みにいらいしゃい」

彼は「ありがとうございます」と再び頭を下げた。自分のカバンを持って、「じゃあ、行ってきます」とサロンへ通じる階段を静かに降りて行った。

四月二一日（金）

横長の長辺を留めたA4のコピー用紙を何度か繰り返し見て、耳に挿した赤いサインペンを手に取った森田さんは、そのままキャップを外すことなく、ペンを横に置いた。「うん、コレで、いいんじゃないでしょうか」と、紙面から顔を上げた。

「今週も、お疲れ様でした」

彼は椅子に座ったまま深々と頭を下げ、コピー用紙の束をトレイに入れた。印刷物の元になったデータを、ドラッグして「完成原稿」のフォルダに納めた。

「それで、どう？」

森田さんはテキストファイルの名前を変更し、モニターを軽く指差し確認してから振り返った。

「朋子さんのおかげでアクセスはあるんですが、書き手が足りてないですね」

彼は画面を切り替え、アクセス解析の画面を見せてくれる。確かに、私のエッセイはよく見られているらしいが、他の記事はあまり伸びていない。

「原稿をかき集めて、来月辺りに創刊号にしてもいいんですけど、朋子さんのそれじゃダメなんですよね？」

「私的にっていうか、編集長的にそういう雑誌にはしたくないんですよ？」

私の返しに、森田さんは苦笑いを浮かべ、「うーん、そうですねえ」と唸りながら後頭部を掻いた。

「もうちょっと、ごった煮の部活感を出したいですよね。せつかくなら、フィクションの割合も増やしたいんですけど、いい人とか合う人が中々いないんですよね……」

このままボリュームだけ出しても、私のエッセイと彼の小説と、小野寺さんたちのちよつと捻った情報提供ページだけでは確かに物足りなさはある。もう、二人、三人ぐらい、できれば四、五人ぐらいは作家が欲しい。

自分の席で仕事に勤しんでいる武藤さんは、エッセイは書けるものの、小説はあまり得意じゃなさそうだし、安藤さんをお願いしたとしても、独自の映画批評コーナーぐらいしか頼めない気がする。

芽衣さんの別名義の漫画や挿絵も挟まっではいるものの、コレから拡がっていく未来はまだ描けない。

「サイト上で募集してたり、お問い合わせフォームから応募があつたりもするんですが」

「それで、いい人が来たら困らない、と」

森田さんはゆっくり頷いた。彼の思い描くイメージ、世界観に合うかどうかというハードルも着実にある。上手い下手はあるとしても、それ以外の「何か」が噛み合うかどうか、そこが肝にはなってくる。フリーリングやセンスが合うかどうか、コレばかりは運次第。

「哲朗くんの身近なところに、そういう人居ない？」

森田さんは、武藤さんと打ち合わせが終わって自分の席に戻っていく哲朗くんに声をかけた。彼は椅子に座りながら、少し考え込むように「うくん」と唸る。

「聞いてはみまずけど、僕のところより、みいちゃんの学部の方が居そうだなあ……」

彼は隣の瑞希さんに視線を送る。彼女は「え？ 私？」とパッと顔を上げた。

「そうだ。立命の映像だったっけ」

「そうですね、な、なんででしょう？」

哲朗くんが、彼女に今までの経緯を説明する。彼女は軽く頷く。

「そうか。学生とか知人に当たってみればいいんだ」

森田さんは、目の前のモニターを見ながら、独り言のように呟いた。彼は一人で納得したらしく、大きく頷いてこちらに顔を向けた。

「書き手の方はこっちで頑張ってみるんで、購読者の件はお願いしてもいいですか？」

力のみなぎつた彼の目に、「ええ」と反射的に応えてしまった。

なんだかんだでこの編集長、頼りになるじゃない。おばちゃんのネットワークで、目一杯支援しなくっちゃ。

五月二七日（土）

月末の土曜日、久しぶりにのんびり出かけようと思っていたのに、急に沙綾から連絡があったために、自宅でゆったりと本を読んでいる。数日前までは晴れ予報だったのに、前日の予報では曇りのち雨だから丁度いい。

窓の外は雨がパラつき始める中、私のいるリビングでは雨の音なんか微塵も聞こえず、キッチンで悪戦苦闘している沙綾の建てる音が響き渡っている。永らく積んでいた本を紐解いて、読書に集中して読み切りたかったのに、娘のドタバタが気になってしまう。顔を上げ、沙綾の様子を眺める。

「オーブンだったら、あっちの家にもあるでしょう？ レシピは貸してあげるから、自分の家でやったら？」

「ダメダメ。現地のオーブンとキッチンがシミュレーションできなきゃ、意味ないでしょ？」

沙綾はレシピ本をジッと睨みつけながら、薄力粉をふるいにかけている。お昼を食べたばかりだけど、今からその段取りで、夕方までにケーキなんて出来上がるのかしら。

「もっと簡単なクッキーだつて載ってるでしょ？」

「せっかくの誕生日なのに、クッキーじゃ現地で作る意味ないじゃない？」

沙綾は私の提案を突っぱねて、作業に戻る。

「あなたがわざわざケーキを作ろうだなんて、よっぽど大事なお友達なのね」

最近懇意にしている、歳が少し離れたお友達。仕事仲間でもあり、将来の義理の妹かもしれない、可愛い妹分。沙綾は私の茶々を完全にシャットアウトして、ケーキ作りに没頭している。辿々しい手つき、細かいことが苦手そうなのもよく分かる。一緒に暮らしていた時も、せいぜい簡単なチョコ菓子を作る程度だったし、今も料理なんてそんなにしてないんだろう。一輝さんは普段、どんなものを食べているのか、他人事ながら可哀想な気もしてくる。

沙綾は、ボーッと彼女を眺めていた私の顔を見ながら、「なに？」と聞いてきた。私は「なんでもない」と首を振る。

「お手伝いしましょうか？」

「ありがとう。お気持ちだけいただいております」

本当にケーキなんか出来るのか心配だったけど、本を読みながら覗きにくくと、少しずつそれっぽいものに近づいていく。レシピ本の通りではなさそうだけれども、彼女らしいアレンジが効いていて、不格好なりに美味しそうな気がする。

上手に焼き上がったスポンジを切り分け、間にフルーツを挟んでクリームを塗っていく。美味しそうな匂いに、遠くでケビンが切なそうに声を上げる。彼にオヤツを上げてから、もう使わなさそうな調理器具を洗っていく。

あらかた片付いたら、コーヒーマーカーを動かして、エスプレッソを入れる。沙綾はそれらしいケーキが出来上がったところで満足して、試食のセッティングにまで気が回らない。私があればこれ段取りしてやって、やつとお皿に切り分けるところまで来た。

「この、残りはどうするの？」

「お母さんが食べればいいんじゃない？」

そこそこしつかりした手作りのホールケーキ。二切れ食べたところで、まだまだだたつぷり残っている。

「適当にラップするから、持って帰りなさい」

「えー、めんどくさい」

「いいから。あの彼氏にも食べさせなさい」

私はとりあえず、残りのケーキにラップをかけて、食卓につく。フォークを手に、「いただきます」と一口食べる。甘さ控えめと言えば聞こえはいいけど、単純に甘みが足りない。

「ちゃんと計って作らないと」

「いやあ、失敗、失敗」

彼女は舌を出して可愛らしく言った。

「じゃあ、もう一回だ」

え、まだ作るの？ もうそろそろ夕方の散歩に出かけて、夕飯の段取りをしたところなのに、沙綾は私の予定を考慮する気など微塵もなさそうで、やる気満々な表情で自分のお皿に乗ったケーキを食べていく。ちよっぴり鬱々とした気分になりながら、本なんて読まずに陰ながらお手伝いしなくてはと、密かに決めた。

初出 令和三年五月二八日  
P182にて公開

六月一八日(日)

一昨日の夜、森田さんから打ち合わせをしたいとダイレクトメッセージが来た時は、ちよつとだけ驚いた。「できるだけ近々で」と言われたから、「日曜日でも良ければ」とスケジュールを出すと、そのまますんなり通つて今に至っている。彼の奥様は何度かお客様としてお越しいただいているし、お嬢ちゃんたちとも仲良くさせてもらっていると思うけど、彼に自宅サロンへ赴いてもらうのはこれが初めてだろうか。

私は完全にオフのつもりで、テレビもつけっぱなしにしたまま彼を出迎え、お茶を淹れる。彼の手土産、葛屋さんの若鮎に合わせ、久々に緑茶を出した。私が「どうぞ」と促すと、彼は「いただきます」とお茶に手をつけた。口を十分に湿らせてから、話を切り出す。

「日曜日なのに、お時間いただいてすみません」

「こちらこそ、父の日なのに良かったのかしら？」

今日、彼は一人でうちへやって来ている。お子さんたちは、ママと共に京都のお祖父ちゃんへ逢いに行っているらしい。彼は短く息を吸い、表情を少し引き締めた。

「単刀直入に申し上げると、沙綾さんを主演に、自主制作映画を撮らせていただけないかと思ひまして」

「あら、そんなこと？」

「朋子さんの計画もあるかと思ひまして、本人の許諾を取る前にお話だけさせていただけたらと……」

最近の沙綾は、何かと忙しくしているようで、大学生の課題を兼ねた映画制作にも関わっているし、瑞希さんの自主制作にも脚本作りから関わっているらしく、モデル、インフルエンサー以外の業務もそれなりに立て込んでいるらしい。

女優としてのキャリアになるかどうか、微妙なのはよく分かるけど、何事も経験な気もする。健康を害さない程度に数をこなす、圧をかけてもらうのは悪いことではないと思う。

「お好きになさってくださいって、結構です。森田さんにはヒイラギのことでお世

話にもなってますし」

「いいんですか？　ありがとうございます」

彼は深々と頭を下げた。その頭を見て、私は思いついた条件を付け加える。

「ただし、脚本や絵コンテは事前に私へ確認を取ること、撮影やビジュアル面は安藤さんに相談すること、試写に私を同席させること」

可能なら、「公開まで漕ぎ着けること」も付け加えたかったけど、それはやっていくうちに考えればいい。頭を上げた森田さんの顔には、「それだけでいいのか？」と言わんばかりに、弛緩した表情が浮かぶ。彼は、力が抜けた声で「それはもちろん、おっしゃる通りにさせていただきますけど」と言った。

「御用はそれだけ？」

彼は「わざわざお時間いただいたのに、すみません」と軽く頭を下げる。

「直接お会いして、お話しておきたかったので」

ダイレクトメッセージなり、電話なりでパツと済ませても良かっただろうに、わざわざご足労いただいて。その殊勝さに、ますます編集長が好きになる。クリエイターとして、どんどん色んなことに挑戦してもらって、経験もスキルも伸ばしてもらいたい。

彼が持つてきた若鮎を摘みながら、テレビから聞こえてきた「地震から丸五年」のフレーズに、「あの時どうだった」と思い出話に花を咲かせた。

初出 令和三年五月二五日 PIXIVにて公開

六月二六日（月）

「あの朋ちゃんが、臨時休業するなんてな」

女性専用のサロンスペースに、普段なら出入り禁止のおじさんが自然体でコーヒーを飲んでいる。自分が手土産に持ってきたお菓子を摘みながら、のんびり身体を休めている。

彼はコーヒーの湯気で曇ったメガネを拭きながら、ゆったりとした低音でボソツと呟いた。

「やっぱり、歳かね」

「エアコンと夏バテかしら」

私の回答に、彼は「ああ」と声を出して頷いた。「昨夜も一昨日も、雨だったつけ」と、言った。窓を開けて寝るには少々強い雨脚、エアコンを付けずに寝るには寝苦しい夜が続いていた。

私は、彼が持ってきた書類に目を落とした。疲れている人のためのサロンを、疲れたからと臨時休業するに至った一番の原因を思い出した。

「書類の差し替えなんてメールで十分だったのに、わざわざ菓子折持って来たのは、コレか」

「そう。直前の変更で、本当に申し訳ない」

彼は椅子に座ったまま居住まいを直し、深々と頭を下げた。来週末に予定されている女性起業家向けイベントのタイムテーブル。当初の予定では五〇分だった基調講演が九〇分に延びている。

「もう一つの講演が急遽キャンセルになってね。他も目一杯調整したんだけど、コレが限界で」

年齢の割におちやらかした風貌をしている彼だけど、ふざけている気配はなく、嘘をついているようにも見えなかった。彼なりに精一杯やった結果なら、仕方あるまい。

「私が飲めば、丸く収まるのね」

「できれば、ギャラも据え置きだと助かるんだけど」

彼は「お願い」と顔の前で両手を合わせて、私に拝んだ。彼、安藤憲剛とは長

年、持ちつ持たれつでやってきた。友人として、できる範囲の無理はしてあげたい。

「分かったわ。了解。ただし、懇親会の出席は期待しないこと」

「つまり？」

「懇親会は、当日の体調次第」

彼は「了解」と頷いて、手元の資料にペンを走らせた。新しい条件を織り込んだ契約書を改めて郵送することなど、その後の手続きを確認しあった。

彼は自分が広げた荷物を鞆にしまいながら、「コレで一つ、肩の荷が降りた」と言った。「私に押し付けただけでしょ」と、嫌味を返すと、彼は苦そうな笑みを浮かべた。

「そうそう、夏バテだったら江坂に鰻食いに行こうよ」

「え、今から？」

彼はカバンから車のキーを取り出し、「足ならあるし」と微笑む。

「帰りは、お宅の婚殿に送らせるしさ」

彼が帰社する寄り道に付き合っ、彼の部下である一輝さんと帰ってくるのも悪くはないが、九〇分に延びた講演の練り直しも早急に手をつけなくてはいいい。

「白焼きもあるぞ」

彼はグイグイ私の心を揺さぶってくる。バテた頭で考えたところで、下手の考え休むに似たり、か。

「憲ちゃんのポケットマネーつてことなら、乗りましょう」

私の一言に、彼は「うっ」と唸って考え込む。少々間を置いてから、「よし、分かった。そうしよう」と覚悟を決めた。

「どうせなら、さっきの書類も片付けちゃおう。ハンコとか、準備よろしく」

彼は「駅前の駐車場で待ってるから」と付け加え、一足先に出て行った。私は急遽出かけることになった自宅サロンの戸締りと、手続きに必要な文具を取りに二階へ上がった。

七月一三日(木)

微かな緊張感を漂わせた華やかな女子大生が、私の隣でお行儀よく自分の注文が届くのを待っている。視線は少し離れた向こうのテーブルに向いているらしい。「貴女もあちらのテーブルが良かった？」

私の言葉に、彼女はハツとしたらしく私の方へ自然な愛想笑いを向ける。嫌味も力みも感じさせない、非常にナチュラルな笑顔に、作品から受ける印象とは違う人物像も見えそう。

彼女は落ち着いた様子で、自分の声に耳を傾けながら言葉を紡ぐ。

「いえいえ。今日はあくまでも見学なので、お仕事の邪魔はできませんよ」

高すぎず、甘すぎず、声まで華やかで程よい心地よさを持っているとは、中々の人たらしのようで。脚本や物書きだけでなく、出役もやれば沙綾と釣り合いも取れそうな器量なのに、持って生まれた武器を全て使うつもりはないのだろうか。「それに、朋子さんとご一緒できるなんて光栄です」

「誰に何を吹き込まれたか知らないけど、持ち上げたって何にも出ないわよ」

「奢ってもらおうと思っただんですけど、ダメですか……」

彼女はオーバーにしょげて見せるが、そういうコミュニケーションも重々心得ているところが少し、鼻につく。向こうのテーブルで沙綾と目の前のモニターを見てディスプレインしている瑞希さんの方が、個人的には素直で好みかも。

テーブルに運ばれてきた季節限定の大きなかき氷を、色んな角度で写真に収めると、「いただきます」とかじりついた。私はスイートポテトと二種類のお芋が載ったプレートに手を付ける。

見た目の可愛らしさに反して、しっかりとお腹に溜まる感覚。咀嚼の満足感もあって、この後の晩ご飯はそんなにいらなないかもしれない。

目の前で山のように盛られていたフワフワの水は、瞬く間に嵩を減らしていく。さっきの緊張感はどこへ行ったのか、食べっぷりは中々見応えがある。私がそうやって見つめている間も、彼女の視線は向こうのテーブルに向いていた。

向こうは向こうで、こちらのことなど一切気にする様子もなく、運ばれてきたお芋とかき氷にキヤーキヤー言いながら、楽しそうに笑みを浮かべている。

「やっぱりあつちのテーブルで、一緒に楽しくやれば？」

「いえいえ。コレぐらいの距離で観察するのが今日の目的ですから」

目の前の彼女は、遠くを見るような目つきで沙綾を見つめている。

「そんな取材で、沙綾を魅力的に撮れるのかしら？」

「撮るのはあくまでも監督ですから。私はいいホンのための着想が得られればいいだけですから」

あくまでもやり方は変えずに、自分の得意な領域で勝ちに行く、か。その若さでそのこだわり、鼻っ柱の強さはご立派だけれども、その頑固さ、優秀さが作家として致命傷にならなければいいけど、いらぬ老婆心を抱きすぎかしら。

どっちに転んでも、若手クリエイターにはいい経験になりそうな予感。口を出しすぎず、程々のところで手も出さず、中立を保つて見守ることに徹しよう。

そんなことを考えながら、目の前の伝票を自分の方に引き寄せた。

初出 令和三年七月一九日 PIXIVにて公開

八月二日（水）

施術室を片付け、さつきまで使っていたオイルの在庫を簡単にチェックする。お一人ずつ終わるごとに実施する、落とし物、忘れ物のチェックを兼ねた拭き掃除に取り掛かる。

普段なら、先に表の看板を架け替え、サロンの入り口を施錠した後に行う仕事だけど、今日は最後のお客さんを迎える前に済ませてある。

ベッドの掃除から床の掃除に切り替えるタイミングで、更衣室から沙綾が出てきた。彼女はスマホを見ながら、カウンセリング用のリクライニングチェアに身体を預けた。横の小さなテーブルには、水が入った紙コップが置いてある。それを口元に運びながら、沙綾は「あれ、お母さんは参加しないの？」と言った。

私はウェットシートを付けたモップをかけながら、「急に言われても、土日は忙しいから」と答えた。

「私は都合つけられても、お客様にはお願いできないでしょ？」

「そっか、そっか。一応、予約が取れない隠れ家サロン、だもんね」

床掃除をしているから表情を確かめられないけど、きつと底意地の悪い笑いを浮かべているのだろう。「どこで育て方を間違えたのか」と悩むべきなのか、女優、モデルとして「立派に成長している」と納得すべきなのか……。後者だと思つて、無用なストレスを抱えずに忘れてしまおう。

ウェットシートを外し、ドライシートに付け替える。ドライ、ウェットで、もう一回ドライをかけて、入念に拭く。手と身体を動かしながら、さつきの施術や、今日一日の接客を振り返る。収支の確認や反省は、仕事着から着替えた後でいい。今日も、一回一回の施術をちゃんとやれた。一日中サロンで仕事をしたのは久々な気がする。セミナーやら、交流会やら、他の仕事も楽しいけど、やっぱりココが本業で私の原点なのね。

モップをバックヤードに片付け、カウンセリングスペースに移動する。沙綾はまだリクライニングチェアの上でスマホを触っていた。彼女はチラッと私の方を見るものの、すぐさま自分の作業に戻る。

私は私で立ったまま、デスクのモニターに目を落とす。メールやSNS、チャット

ツールに、すぐ返信しなければいけないものは飛んできていない。あとは、ココと更衣室の照明を落とし、使わない器具の電源を切ればサロン業は終了なんだけど、沙綾はまだ居座るつもりなのかしら……。

私が顔を上げて沙綾の方を見ると、彼女はなおも、スマホを触っている。私は一つにまとめていた髪を解きながら、「晩ご飯も食べていく？」と彼女に訊いた。沙綾はようやく顔を上げ、首を横に振って、「もう、帰る」と言った。

「今から駅前まで行って、みんなでご飯だから」

「今から？」

私は思わず、時計に目をやった。そろそろ午後七時。沙綾は「そう、今から」と念押しした。彼女はリクライニングを戻して、椅子から腰を上げる。

「迎えがもう着くっていうから、帰るね」

「専属のドライバーがいるなんて、流石は主演女優ね」

「まあね」

沙綾は誇らしげに、入ってきた時と同じように、居住用の玄関へ歩を進める。

私は彼女を見送りながら、サロンスペースの照明を切るスイッチを押した。

初出 令和三年九月二五日 PIXIVにて公開

八月二九日（火）

自分たちの手でペンキを塗ったという壁は、一つの汚れもなく、窓から差し込む光を柔らかく跳ね返していた。窓際の観葉植物は置いたばかりらしく、まだまだこれから伸びるのだとか。

調理場が丸見えの、長い長い一本の木を使ったカウンター席も、背の高い椅子ながら座り心地は悪くなさそうに見える。テーブル席の椅子も程々の柔らかさで、電源の取れる席も長居するのに丁度良さそうだ。

商店街の一番端で駅から少し歩くものの、この距離感で長居できて電源もある喫茶店というのはいささかそうでなかった。決して広くはない店内だけれど、窓や座席の配置を工夫することで狭さを感じさせない造りになっている。

向かいの席に座った沙綾の前に、パンケーキが置かれた。先に来ていたコーヒーに、お代わりも注いでくれた。まだ何も書かれていない便箋を睨みつけながら、沙綾はパンケーキにシロップをかけた。

「どう？ 少しは書けそう？」

沙綾は便箋を脇に置き、スマホを文鎮代わりに乗せた。ナイフとフォークを取り、パンケーキを一口食べた。

「ぜんぜん、思いつかない」

「せっかく陽菜ちゃんから便箋をもらったのに」

「お父さんへのメッセージなんて、全然出てこないな」

「Mサイズのオフィスで受け取る前は、「父親の誕生日と手書きのメッセージ」に変なスイッチが入って、やたらと鼻息荒くなっていたのに、いざ書き出すとなると急に熱が覚めてしまうのは、誰に似たのだろう。少なくとも、私ではない。」

「今から送ったって、間に合わないしな」

「だからって、メールの一通だけじゃ可哀想じゃない」

「じゃあ、お母さんが送れば？」

「私はもう、赤の他人だもん」

沙綾はブスツとした表情でコーヒーカップを口元に運んだ。私が貸した手元のペンを避け、カップを元の場所に置く。

「書かないんなら、ペンは預かるうか？」

私が手を差し出すと、彼女はスッとペンを自分の方に寄せる。

「もうちよつと借りてでもいい？」

彼女のことから、ダメだと言つても聞く耳を持たない。こういうことも織り込んで、使い捨て用のペンを差し出さなかった自分が悪い。書き心地がとても気に入っている一番のペンを人質に取られてしまつては、もう少し付き合う他ない。幸い、今日のスケジュールには余裕がある。ここを出たら、彼女のペンを買に行こう。

沙綾は順調のパンケーキを食べ進め、しつかり味わいながらも便箋を見つめている。

「そもそも、英語の方がいいんだっけ。日本語でも大丈夫？」

「メールは英語だったんじゃないの？」

「アレはほとんど、定型文のコピペだから……」

いつたい今まで、どんなメールを送つていたのやら。便利な世の中になつたと思うべきか、娘の妙な要領の良さを褒めるべきか。それは後で悩むとして、「どつちでもいいんじゃない？」と答えた。

「向こうには健人もいるし、肉筆であなたのメッセージを送る方が大事なんだから」

沙綾は「そういうことか」と漏らしながら、最後の一口を頬張つた。

「ここでもうちよつと粘つてもいい？」

私は別に構わないのだけど、とカウンターの向こうにいるオーナーさんへ視線を送る。彼はにこやかに笑顔を返してきた。とりあえず、違う種類のコーヒーを頼もうかしら。パンケーキのお皿を下げてきた店員さんに、メニューを持つてきてもらおうようにお願いした。

初出 令和三年一〇月二日 PIXIVにて公開

九月二一日(月)

明日の天気予報でもと、テレビを点けて適当にチャンネルを合わせる。食卓の上には、立派な国際郵便が置いてあった。表には、久々に見る健人の日本語で、こここの住所と宛名が書いてある。

去年の終わりに転居して住所が変わったとメールしたら返事が来なかったけど、なんだかんだで見えていたらしい。メールも筆不精な息子の顔を思い浮かべながら、味わい深い彼の字をじっくり眺める。

残念なことに、私宛のメッセージや荷物はなく、先日送った沙綾のメッセージに対する元夫からの返事と、彼女宛っぽい小さなプレゼントが入っていた。自分で宛名を書いて、直接娘に送れば良いのに、日本語が書ける息子の手を借りて別れた妻に送ってくるなんて、なんて性格の悪いこと。

「ねえ、ケビン？」

私の足元でのんびりとテレビを見ている愛犬の頭を撫でてやる。彼は私の顔を見上げ、ペロリと舐めてくれた。

天気予報を見るつもりで付けていたテレビは、「あれから二二年」と特集を始める。そう言えば今日は、㊿だ。当時は一歳になる直前の沙綾とカリフォルニアで生活していた。結局アレから健人が三歳になるまで向こうで暮らして、こっちに帰って来たんだ。

その健人とも、離れて暮らすようになってもう何年？ 確か、㊿の年末だったからえーつと――

スマホの通知に、現実に戻される。画面に出た通知は、沙綾からの「もう着くよ」のメッセージ。アプリを開いて、「了解」と返した。適当なスタンプも送っておく。アプリを閉じる前に、既読がついた。

結局、沙綾はどれだけ長居するのだろうか？ 晩ご飯を食べていくのか行かないのか、その返事はまだもらっていない。彼女がいらなかったとしても、私の食事がいつになるのか分からない。パパッと食べられるように、とろ火で温めてしまおうか。

ケビンにそのまま待っているように指示して、冷蔵庫から昨日作ったカレーの

入った鍋を取り出した。そのままコンロに乗せて、一番小さい火にして温める。換気扇の音で、テレビが何を言っているか全く分からない。CMが終わると、ようやく天気予報らしい。

キッチンから出て、引いたままの椅子に腰を下ろす。天気予報が始まったかと思えば、インターホンが鳴った。画面には沙綾の姿が写っている。テレビの音を少し大きくして、「開いてるから、どうぞ」と応えた。

再びまだ暖かい椅子に腰を下ろし、明日の降水確率に耳を傾ける。とりあえず、傘はいらならしい。週間予報に切り替わるタイミングで、沙綾がリビングまで上がって来た。

「へー。今日はカレーなんだ」

沙綾はケビンを乱暴に撫で回しながら、キッチンから漂ってくる匂いに鼻を傾ける。

「食べていく？」

「お母さんのカレーを食べたいのは山々だけど、一輝が待ってるからなく」

「あら、そう？ こんな時間に呼び出して悪かったわね」

彼女は「全然大丈夫。気にしないで」と食卓に腰掛けた。卓上の封筒を指して、「コレ？」と訊く。私が頷くと、彼女は中身を確かめ始めた。

「それで、お茶にする？ コーヒーにする？」

私がコーヒーメーカーの前で訊くと、彼女は「おかまいなく。すぐに帰るし」とそっけなく答えた。

初出 令和三年一〇月一三日 Pixivにて公開

一〇月八日(日)

キッチンから漂ってくるクリームの甘い匂いに、遠くの方でケビンが切なそうに声を上げている。キッチンにいるはずの沙綾が、「近所迷惑でしょ」とケビンを叱っていた。彼女がそんな風に声を荒らげたところで、彼は微塵も言うことを聞かないだろう。それに、美味しそうな匂いについての反応してしまうのは仕方がない。

私は愛犬と娘のやりとりを棚に上げ、目の前のモニターに意識を向け直す。キーボードとマウスを操作して、最後のページまで目を通した。

「で、これを印刷したのがこれです」

一輝さんが、一番前にPDFを表示して、モニターを指しながら横に置いたA4用紙を指差した。彼は再び、「コレが、これです」と画面のデータと印刷物とを紐づけるかのように指を動かした。

「書き換えたいところがあれば、こつちを編集してください」

彼は横からキーボードを操作して、スライドの編集画面に切り替えた。

「新しく印刷する場合や、編集方法が分からない時は、またボスに連絡してください」

「忙しいのに、ゴメンなさいね」

「いえいえ。お世話になってますから」

彼は笑いながら、持ってきた印刷物を、持ってきた真新しいクリアファイルに納めてくれた。私は「メディアを取り出す」ボタンを押して、「コレで、外しちゃって大丈夫かしら？」と画面を確かめてもらいやすいように身体を引いた。一輝さんはモニターを見ながら、「ああ、コレで大丈夫ですね」とUSBメモリをゆつくり取り外す。

彼はそのまま、食卓の椅子にかけていた薄手の上着のポケットへ、USBメモリを放り込んだ。それを見ていた沙綾が、目の前の鍋をゆつくりかき混ぜながら声をかける。

「ねえ、終わった？」

一輝さんは、私の方をチラリと見て「多分」と返事をした。私は彼に頷いて返

し、背中を向け、開いていたファイルを順番に閉じた。電源は切らずに、モニターも閉じる。

食卓の方へ振り返ると、洗面所で手を洗ってきたらしい一輝さんが、リビングへ戻ってきていた。私も彼に倣って両手を洗いに行く。キッチンの方がにわか騒がしくなり、ちよつぷりヒヤツとする音も聞こえてくる。パパツと手を洗い、リビングに戻ると、沙綾と一輝さんとで夕食の準備を進めてくれていた。幸い、何かを落としたり、何かを割ってしまった様子はない。

「もうちよつと丁寧に扱って頂戴」

「高いのは分かっているから、大丈夫、大丈夫」

怪我をしていないのなら、食器の値段なんてどうでもいい。どうしても身振り、手振りが大胆になりがちな彼女には、野暮な注文だろうし。奔放な育ち方をした割には、シチューをお皿に盛り付けるぐらいは出来るようになっていた。

一輝さんは一輝さんで、穴だらけの彼女をサポートしつつ、彼女では考えもつかないようなところを、しつかりケアしながら動いていた。一皿一皿、仕上げにパセリを散らしながら食卓に並べ、冷やしておいたワインの栓も抜こうとしてくれている。

一輝さんは、沙綾に何を握られているのか。そんなことを考えながら、久しぶりにケビン以外の誰かと夕食を共にする日曜日。資料作り、また頼んでみようかしら。

初出 令和三年一〇月二三日 PIXIVにて公開

一〇月二〇日（金）

JR茨木駅まで移動して、西口から地上へ降りて線路沿いに北上する。居酒屋裏の地域猫たちを眺めながら、線路横の歩道橋を上り下りすると春日商店街へ入っていく。餃子の専門店を通り過ぎ、その先の丁字路も曲がらずに真っ直ぐ行つて、お花屋さんの前で足を止めた彼は、趣のあるドアを開いた。

商店街の雰囲気とは打って変わって、非常にムードのある薄暗い店内。落ち着いた間接照明が、如何にもな空気を作り上げている。

予約もせずに足を踏み入れたのに、店主は快くカウンターの奥の席へ案内してくれた。彼が一番奥の席に行き、私は一つ手前の席に荷物を置いた。コートを掛けてもらい、荷物をテーブル下のフックにぶら下げる。

彼は椅子に座りながらグルッと店内に視線を巡らせ、店主が持ってきたメニューを「ありがとう」と受け取った。

「久々に来たけど、また味が増したね」

「そう？ 私は初めて入るわ」

JRの駅前まで出てきても、どこかで買い物に立ち寄るか、さっさとバスに乗り換えて帰ってしまう。商店街の奥の喫茶店もこの間行つたけど、それもわざわざ声が掛からないと行かなかつたように思う。

「朋ちゃんは何にする？」

彼は私にもメニューを見せてくれるが、説明を読むだけでは何が何やら分からない。どうやら彼は海外のピルスナーに決めたようだけど、私は同じメーカーの黒ビールを選んだ。

彼はそのまま前菜の四種盛りと、自分用のカレーも注文した。私は自分の腕時計に目をやり、時間を確かめる。

「まだ五時前だけど、そんなに頼んで大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。俺は従業員じゃないからね」

彼はニヤツと笑って、運ばれてきたビールに口をつけた。「うん、美味しい」と呟くと、一緒に運ばれてきた四種盛りにも早速お箸をつける。ポテトサラダの上の方を一口持つて行った。

私は彼の言動に一抹の不安を覚えながら、目の前の黒ビールに口を付ける。独特の香りと甘みが強烈なクセになっている。このクセの強さはハマるかもしれない。店主がグラスの横に置いてくれた瓶を見て、銘柄を確かめる。

「他所で買おうと思っても、全然売ってないんだよ」

新しい来客に應對して忙しそうな店主の代わりに、彼が説明してくれる。彼の言葉に疑問を抱きながら、銘柄をスマホで検索してみると、専用の通販サイトが数件出てくる。通販サイトから注文するしかないとなると、フラッと街中のリカーショップを訪れたって買えないかもしれない。

彼が飲んでいるピルスナーも一口、味見をさせてもらう。これもこれで、クラフトビール特有のアルコールの強さ、ホップの苦味がガツンと来る。「大丈夫」と言っていたけれど、こんなのを一杯、二杯飲んでから、本当に仕事ができるのだろうか。

彼は四種盛りをチマチマ摘みながら、今日のセミナーの感想も話してくれる。褒め言葉はありがたいのだけでも、ビールが美味しすぎて話が全然入ってこない。おツمامも、一つ一つしっかり手間がかけられていて、ちゃんと美味しい。

期待値が上がり上がったところで、彼の前にカレーがやってくる。こんな早い時間に血糖値をグッと上げてしまつて、本当に大丈夫なのか。私の心配を他所に、彼は大きな口でカレーを掻き込んでいく。

匂いに負けてジッとカレーを見ていると、彼は「スプーン、もう一つもらおうか?」と聞いてきた。私は「一口だけ」と彼からスプーンを受け取り、ルーを小さくすくつて舐めてみた。

初出 令和三年一〇月二六日 PIXIVにて公開

一月五日(日)

久しぶりに、丸一日オフの日曜日。午後から雨模様で、夕方のケビンの散歩まで、家で独り静かに読書か映画鑑賞でもと思っていたのに、何故かキッチンから延々と賑やかな音が聞こえてくる。

読書に集中したくても、音が気になって仕方がない。字面をゆっくり追いかけてながら、少しでも物語に入り込めるよう試行錯誤してみる。

「本当に誕生日会やらなくて良かったの？」

やっと物語の世界、空気を掴みかけたところで、キッチンから沙綾が声をかけてきた。彼女は手元の作業から顔を上げ、私の方を見る。

「一日オフの日曜日なら、お客さん呼べば良かったのに」

彼女は私の返答を待たず、失敗したらしいレシピを最初からやり直すべく、手元のスマホに視線を落とす。何度もトライしているが、SNSの動画と簡単な文字情報しかなく、彼女のスキルでは参考動画のようにパパッと成功には辿り着けないらしい。

私は壁にかけてカレンダーへ視線をやった。色々と書き込んであるカレンダーだけど、自分の誕生日までは印をつけていない。家族や親戚、知人の誕生日ならいざ知らず。それに、もはや祝ってもらって嬉しい年齢でもない。

「あっちの家で沢山人呼んで、私が女王だ、ってやってたお母さんも好きだったけどな」

「私が女王だなんて、一回も言っていないけど」

「口には出していないけど、全身からそういうオーラが出てた」

一度集まるのをやめた頃より、さらに数年前。沙綾と共に暮らしていた頃は、まだまだそんな感じだったかもしれない。流石に今は丸くなったと自分では思っているけど、周りの様子を見るに、まだまだ尖りっぱなしのような気がする。今度の誕生日でアラフィフなのに、いい加減に落ち着かなくては。

キッチンの方から、沙綾の唸り声が聞こえてくる。どうやら、また上手く行っていないらしい。読みかけの本に手近な葉を挟み、彼女の方に近付いてみる。沙綾は「手は出さないですよ」と、燦々たる状況を手で覆いながら私に注文をつけた。

「手は出さないし、口も出さない」

私は沙綾のスマホを摘み上げ、レシピ動画を再生した。出来上がりは確かに見栄える、透け感のあるパイらしい。その見栄えを作り上げるまでの工数も、相応にかかるようだ。扱う材料も中々クセがありそうな物がチラホラ。ベースのパイ生地をシートでお手軽にしたところで、そんな簡単にお手本通りにできるとは思えない。

沙綾は眉根を寄せながら、腕を組んで考え込んでいる。失敗も一度や二度ではなく、彼女が持つてきた材料の半分ぐらいが失敗作に費やされていた。出来損なと言えるレベルですら、まだまだ程遠い。

「無理しなくていいわよ」

私がそう言っても、沙綾は納得していないようで、しかめっ面のまま不機嫌そうにしている。

「ケーキもパイも、無いならいいし、出来合いのものを適当に買ってくるのも十分だし」

年々、甘すぎる物も積極的に食べたいとは思わなくなってきた。どうせなら、コンビニスイーツよりは美味しいものを食べたいと思うけど、それで誰かに負担をかけようとも思っていない。

「貴女の気持ちはよく分かったから」

そういうと、やつと納得したのか、沙綾は頷いて腕組みを説いた。

「じゃあ、あと一回だけ。手も口も出さなくていいから、そこで見てもらってもいい？」

彼女は私からスマホを受け取ると、改めてレシピ動画を食い入るように見つめ、手順を何度も確かめる。やる気と気合いに満ちた表情で、再び最初の工程に着手した。

初出 令和三年一〇月二九日 PIXIVにて公開

一二月八日（金）

ドアが開くたびに、車外の冷たい空気が入ってくる。二つ前の万博記念公園を過ぎれば、車内の乗客も乗降客も数える程度。金曜日の夜ならもう少し乗っていても良さそうなのに、二十二時台は流石に少々遅いのもかもしれない。

私たちと一緒に山田から乗って、ずっと向かいの席にいた乗客も降りて、今乗り込んできた人が代わりに座った。すぐにドアが閉まって、列車が発車する。窓から外を見ても、ほぼ真つ暗。眼下を走る車の明かりも、随分と疎らな気がする。私の隣で延々とスマホを触っていた沙綾は、SNSのチェックでも一通り済んだのか、不意に顔を上げて周囲を見回した。窓の外にも目を向けて、自分のスマホに視線を戻した。

「まだ十時半にもなっていないじゃん」

時間だけ確かめて、スマホをカバンに仕舞った。

「九時だからって、慌てて電車乗らなくてもよかつたんじゃない？」

「貴女はそうでしょうけど、私が困るのよ」

沙綾はそれでも不満そうな表情を浮かべている。

「今日はおくまでも私の付き添い。貴女だけで行けば良いじゃない」

「それはそうなんだけど……」

三宮に着いた時から、彼女は終始不満そうに見えた。私の都合で行きたいところに行き、お決まりのお店を周り、新しく見たかったところを見て、やつておきたかったことを一通りやる。

沙綾が付いて来なくてもやるつもりだった予定を全てこなして、事前に決めた予定通りの電車で帰っている。私としては、ランチのお店やお茶をするタイムミングについて彼女の意見を取り入れただけでも大きな譲歩だと思っているけど、彼女はそう思っていないらしい。

「一人で行ったってどこ行けば良いか分かんないし、一輝と行ったってお買い物しにくいし」

「瑞希さんとか、他のお友達と行けば良いじゃない」

「みいちゃんは明日行くんだって」

沙綾は「来年、誘ってみるか」と呟いた。

「あら、クリスマスもまだなのに、もう来年の話？」

「でも、もうほぼ年末って感じじゃない？」

沙綾の意見も分からなくもない。寒空の中、山のような人混みに紛れて神戸の夜を歩いてしまうと、一足早いクリスマスを迎えた気持ちになる。街もテレビも、見るものも聞くものもクリスマス一色の日が続いて、あつという間に年の瀬の話題へ移っていく。

クリスマスを迎える準備も今日で整ったし、年始の色んな算段もほぼ付いている。忘年会とか納会にちよつと顔を出せば、あとは自分用の家事ができれば、それで良い。

「そう言えば、掃除は進んでるんでしょうね？」

「えっ？」

沙綾は不意打ちに言葉を詰まらせた。

「綺麗に使わないようなら、さつさと売り飛ばすからそのつもりで」

私は優しい声音と満面の笑みで娘に釘を刺した。彼女にしては珍しく、神妙な面持ちで「はい」と答えた。なんとなく、しゅんとして見える。

「おせちも、自分たちで何とかしてね。ウチに来られても、貴女たちの分は何にもないんだから」

私の追い討ちに、沙綾はすっかりしよげ返ってしまった。今のうちにコレぐらい言っておけば、流石に自分たちで何とかするでしょう。もつとも、その甘々な予想は、一回も現実になったことはないんだけど。

初出 令和三年一月二四日 PIXIVにて公開

二月二七日(水)

「不和のお父様が、近々お誕生日なんですって？」

レンジフード用のフィルターを手渡しながら、一輝さんの背中に向けて言った。彼は手元や足元に注意を払いながら、私に「ええ、まあ」と曖昧に笑って答える。

トイレや脱衣所の換気扇には、もうフィルターを付けてもらっている。私では中々手が届かない高いところを中心に、自宅もサロンも掃除は一通り片付いた。

夕方からの納会に合わせて、こっちの応援に彼を差し向けてくれたおかげだろう。彼はたまたま休日だったという弟くんまで連れて来てくれたが、流石に手が多すぎて彼は沙綾の方に回された。あっちの大掃除も順調に片付いているのだろうか？ 彼らではダメでも、一輝さんがいれば心配ない、か。

一輝さんは手慣れた様子で代わりのフィルターを付け、「コレで、大丈夫ですよね？」と私にチェックを求めた。ここから確認する分には何の問題もないのに、狭い踏み台の上でわざわざ身体を引いてくれる。私は「OK」と指で丸を作った。

一輝さんは踏み台から降り、小さく畳んだ。

「コレは……」

「その隙間に入れておいて」

彼は私に言われるがままに、ゴミ箱と壁の間にある隙間に、畳んだ踏み台を周りにぶつけないよう、そつと差し込んだ。

私はパツと辺りを見回した。その場から見える範囲で、部屋をザツと眺めてみる。気になるところが全くなかったとは言わないものの、彼にも手伝ってもらって掃除する分には、この辺りが潮時かな。

壁の時計に目をやると、会場へ向かうにはまだまだ早い。この時間にお昼を食べてしまうのも、何だかもつたない気もしてくる。かと言って、何かをやるにしても中途半端な時間。手持ち無沙汰な時間にお茶をしてもいいんだけど、今のうちにやっておきたいこと、何かあったかしらと思っていたら、向こうの部屋からケビンの声が聞こえてきた。

今日は帰ってくるのも遅いし、今のうちにもう一回散歩へ行ってしまうか。

「犬の散歩に行こうと思うんだけど、どうかしら？」

スマホを見ながら私を待っていたらしい一輝さんは、顔を上げて私の方を見た。スマホはポケットに仕舞われる。

「一緒に行っても良いんですか？」

その「良いんですか？」は、私とケビンの両方に向けられたのだろう。私はともかく、ケビンも特に問題はなかったような……。彼の気分もあるだろうから、やってみてから悩めば良い。

「じゃあ、準備してくるから」

私は、散歩から戻ったら、そのまま納会へ向かおうと彼に伝え、コート以外の彼の荷物も持ち出してもらうことにした。彼はそれに了承し、ついでに戸締りまで取り掛かってくれた。

私はそれに感謝しながら、リードとコートを取りに行く。お散歩用のセットも持ち出して、ケビンにリードをつけた。一輝さんの準備が整うのを待って、二人で一緒に外へ出た。

「忘れ物、無いわよね？」

一輝さんに一応確認して、彼が頷くのを待ってから鍵をかけた。ケビンは私たちが歩き出すのを待ってから、我々の横を付いてくる。

日差しがある分、日向はそれなりに暖かいものの、日陰に入るとそこそこ寒い。日中でコレだから、帰ってくる頃はもつと寒いかも。散歩帰りに解散した後、防寒着を見直さなきゃなと考えながら、いつもの散歩ルートを辿り始めた。

初出 令和三年一月二八日 PIXYにて公開

二月三十一日(日) 午前〇時

翌朝起きてからでは間に合わない黒豆の仕込みを終え、ようやく日元から離れた。甘い匂いがまだ微妙に漂っている。換気扇にはもう少し働いてもらおうか。

基本的には自分が食べる用の、おせちとはとても言えないレベルの代物。この時期限定の、ちよっぴり特別な常備菜と言った方が正しいんだろう。どうしても食べたいものだけ、自分で作る。必要に応じて後は買えば、それでいい。

母が祖母から受け継ぎ、私が母から受け継いだ手書きのレシピを、本棚のいつもの場所に戻した。これも良い加減にデジタル保存しなきゃと思いつながら、スキャンしてPDFにするだけの作業を、ついつい先送りしてしまう。また来年、また来年と言いつつながら、このまま時間と共に消えていくような気もする。

最低限の灯りしかつけていない部屋の片隅で、ぼんやりと本棚の暗がりを見て物思いに耽っていると、屋外で雨が降り出した音が聞こえてきた。天気予報では、夜の遅い時間から明け方にかけて降ると言っていた。

雨に合わせて、家の中も少しひんやりしてきた気もする。寝室の灯りを点けに行き、キッチンに戻って換気扇と照明を切った。足元に気をつけながら、自分の部屋へ入る。隣のケビンは、静かによく眠っているらしい。

このままお風呂に入って床に就いても良いんだけど、明日は休みだし、読みかけの本を最後まで読んでから寝ようかしら。読書のお供に、それっぽい音楽でも探そうか。

スリープにしていたパソコンを立ち上げた。動画サイトやプレイリストを開く前に、メールやSNSをチェックする。年末とあって、みんな楽しそうにやっている。タイムラインを眺めていたら、チャットが立ち上がった。

——ママ、起きてる？

私がオンラインになったのを見たらしく、健人がメッセージを送ってきた。

——おはよう、早起きなのね。

——今日なら、ママも起きてると思つて。

向こうは多分、土曜日の朝。一七時間の時差は、中々合いそうで合わない。普段はメールでやり取りするのが精一杯だけど、今日ならほぼリアルタイムでコミュニケーションできる。

——ビデオ通話にしても良い？

お風呂に入っていたら、ノーと答えていた。一応、机上の鏡で確かめると、いつもの顔は保てているように思う。健人は私の答えを待たずに、通話を掛けてきた。私はビデオをオンにして、それに出た。

「元気？」

数年ぶりに見る息子の顔は、だいぶ大人の顔つきになっていた。こつちで生活していた頃より、顔も体も相当しつかりして、母親似だったはずの彼はいつの間にか、父親にそっくりになっている。

「元気よ。そつちは朝から元気いっぱいじゃない」

「まあね。朝の自主トレしてきたところだからさ」

彼は笑いながら、脇に抱えたバスケットボールを指先で回して見せた。彼の背後には、所属するチームのユニフォームが飾られている。

「お父さんはどう？ 元気？」

「お父さんもおばあちゃんも、とつても元気さ」

健人は画面の向こうで、オーバーにリアクションして見せる。その様子に、

「ああ、向こうの子になったんだな」と妙に納得してしまった。

「そつちのパパはどう？」

「まだまだ元気にしてるけど、だんだん歳は取ってきたかな」

私はドアの向こうの愛犬を思い描いた。健人はちよつぴり寂しそうに、「そつちか」と言った。

「来年こそそつちに行つて、また撫でたいな」

「いつでもいらつしやい。お姉ちゃんと一緒に待つてるわ」

お姉ちゃん、のワードに健人は少し嫌そうな顔をした。その様子がおかしくて、私はつい笑ってしまった。

もうすぐ来年。明日一日過ぎたらやってくる来年が、今から楽しみになって

来た。健人と他愛もない話をしながら、どんどん楽しみを募らせていく。

(完)

初出 令和三年一月二十九日 Pivvにて公開